

捨てられ令嬢は隠れドSな公爵様の
執着溺愛から逃げられない

プロローグ

「はあっ……、それだめ……っあああ!!」

薄暗い室内で、一際甲高い嬌声が響く。私は今、大きなベッドの上に生まれたままの姿で仰向けになり、銀髪の綺麗な男に抱かれている。

絶頂を迎えたことすすつと解けるように体の力が抜けていく。心地よい脱力感に包まれながらぐったりと視線を上に向けると、すぐに深緑色の瞳と目が合った。その瞳は優しくもあり、鋭くもある。

「本当にニナは奥を攻められると簡単に果ててしまうね」

「それはレオンさんが激しくするから……」

不満を感じながら文句を言うと、彼はわずかに口端を上げて顔を近づけてきた。そして私の額にそつとキスを落とし、濡れた目元を優しく指で拭ってくれる。視界が先ほどよりも鮮明になり、再び深緑色の瞳に囚われると、心を奪われたかのように視線が逸らせなくなった。

「ニナがかわいい反応してくれるから、追い詰めたくなるんだ」

彼はまるで私のせいだと言いたげにさらりと答えると、私の耳元に唇を移動した。そして、ふ

うつと熱い息をわざと吹きかけてくる。

「あっ……」

「今度は激しくしない。じっくり二ナのことを味わわせて」

レオンの低い艶やかな声が耳から脳内へと響き、背筋がぞわりとした。同時に私の奥に埋まったままの熱杭がずるりと引き抜かれ、その感覚に体は素直に反応する。彼の熱杭は萎えることなく、今もはつきりとその存在感を示している。

「やあつ、耳と一緒にしないで……」

「今度は優しくするよ。二ナが簡単に果てないように、ね」

私が慌てて懇願しても、彼はやめる気は一切ない様子だ。

今の私は彼の体に組み敷かれているので、一切身動きをとることができない。浅いところを欲望に満ちた熱杭で何度も擦られ、熱い舌先で耳^じ朶を丹念に舐^ねられる。じわじわと湧き出るような快感に支配され、私は口元を小さく震わせながらそれを感じていた。

(これ……、じつとしてられない……)

腰をうねらせて逃げようとしてもびくともしない。

「これだけでは物足りなさうだな？」

「ちがっ……」

「遠慮はしなくていい。じゃあ、二ナが弱いこども一緒に撫でてあげる。優しくするよ。でないとまた簡単にイってしまっただろうから」

「えっ……そこはだめっ……ああっ……!!」

私の内腿を撫でていたレオンの手が、迷うことなく結合部の上のぷっくりと膨らんだ蕾に触れる。その瞬間、痺れるような刺激が全身に駆け巡り、体がびくりと震えた。

「逃げようとしても無駄だ。加減はする……、二ナが簡単に果てないように。それとも連続イキしたいか？ どちらでも俺は付き合うよ」

「ああつ、レオンさんの、意地悪っ……」

私は反射的に文句を口にしたものの、絶頂を迎えたばかりの体は敏感なままで、そのまま軽く果ててしまう。当然、彼はそれを見逃してはいなかった。

「中、痙攣しているのか？ 今の二ナは口よりも体のほうが素直そうだ。あまりかわいい抵抗をされると、もつといじめたくなる」

「ああつ、そこ、気持ちいい……また、きちゃう……」

「知ってる。嬉しそうに俺のことを締め付けてきているから。ずっとこうして繋がっていたくなるな」

そう思っているのは私も同じだ。レオンは普段から意地悪なところがあるが、こうしているときはさらにそう感じる。彼は執着心が強いのだろうか。

だけど、そのほうがいい。もう、誰かに裏切られることはたくさんだ。彼とならば、本当の幸せを手に入れることができるのかもしれない。

「レオンさん、キスして……」

余計なことを考えていたら急に切なくなってしまう、思わずそんなことを口に出していた。レオンは嫌な顔を見せることなく、私の言葉に従ってくれる。

「いいよ。二ナが望むなら何度でも……」

「……んっ、レオンさん……もつと……」

重なった唇は私に幸福感と安心を与えてくれる。熱い口づけは私の脳内を溶かし、意識の境界線も曖昧になっていく。これは夢ではないかと思いたくて必死に意識を保とうとしたが、視界がゆっくりと白く染まり、私の意識はそこで完全に途切れた。

第一章

「二ナ、戻ってきたら僕と結婚してほしい」

二年前、恋人のジルが私に言ってくれた言葉。

仕事で二か月ほどこの街を離れることになった彼に、見送りの際に突然求婚された。予想していなかったのが驚いたけれど、すごく嬉しかった。

照れくさそうに返事を待つ彼に、私は「はい」と笑顔で答える。すると、彼はほっとした表情になり、私のことをぎゅっと抱きしめた。

「ありがとう。絶対に幸せにするから。二か月だけ待っていて」

そう言って、彼は去っていった。

しかし、彼は二か月経っても戻ってくることはなかった。半年、一年と待っても一度も連絡がない。

そして、二年経った今でも音信不通のまま。私はまた一人に戻ってしまうのだろうか。それを受け入れることができなくて、今も彼の帰りを待ち続けている。

私の名前は二ナ。特別整った容姿ではないが、腰まである薄茶色の癖のない髪と、淡い青色の瞳

が特徴だと思う。

今の私は平民として街の食堂で働いているが、かつてドール伯爵家の令嬢だった。それなりに裕福な家だったが、あの家での生活は本当に地獄だった。毎日のように義母に怒鳴られ、義妹に嫌がらせをされる日々。本当に息が詰まりそうだった。

そんな日々を過ごしていた私が平民になったのは、義妹とのトラブルが原因だった。

実の母は昔から体が弱かったこともあり、私を産んで間もなくして亡くなった。だから、私には母と過ごした思い出は一つもない。

父は最愛の女性を殺したのは私だと思っているようで、ずっと私を恨んでいた。目が合えば睨まれ、まともな会話なんて数えるくらいしかした記憶がない。けれど、幼い私に同情を寄せる心はあったのか、母の遺品の指輪を持ち出して怒られなかった。それからずっと、その指輪が私の宝物になっている。

しかしある日、わがままな義妹に母の指輪を奪われそうになり、彼女に怪我を負わせてしまった。激怒した義母によって、私は邸を追放されたのだ。行き場のなくなった私に親切に声をかけてくれたのが、私の恋人のジル・エステンだった。

私は仕事に向かう前に必ず教会に立ち寄る。これは恋人であるジルが音信不通になってから続けていること。二年間も続けていると生活の一部になり、苦に感じることはない。

教会に立ち寄るのは昼前が多い。この時間は人があまりいなくて静かで、心を落ち着かせるには

ちょうどよかった。けれど、一人だけ毎日見かける人物がいる。

その男性は、決まって入り口から見て左手前の目立たない席に座っている。

(あの人、今日もいるわ……)

銀色の癖のない髪は、ステンドグラスから差し込む光を浴びて輝いている。そして印象的な深緑色の瞳。綺麗な顔立ちをしているが、表情がいつも暗く、心に深い闇を抱えているように感じる。

素性のわからないミステリアスな存在だからこそ気になってしまうのだろう。

(教会にいるのだから、悩みの一つや二つあってもおかしくないと思うけど……)

そう思いながらも気になるわけ。何度か声をかけてみようと思ったこともある。常連同士だし、挨拶をしても変に思われることはないだろう。けれど、彼のあの暗い表情を見てしまうと、やっぱりやめておいたほうがいいのではないかと思い返して、結局一度も声をかけられずにいる。

今日もそんなことを考えながら中央の通路を歩き、一番奥まで行くと近くの席に腰掛けた。そして、胸の前で手を組んで静かに目を瞑る。願いごとを祈る前に一度深呼吸をすると、心が澄んだ気持ちになり、とても落ち着く。

(今日もジルが元気でいますように……)

頭の中で恋人の姿を思い浮かべて無事を祈る。この瞬間、幸せだったころの記憶が蘇り、自然と表情が緩んでいくのを感じる。これは私にとって、自分が元気になるための儀式のようなものなのかもしれない。

彼は絶対に戻ってくる。だって、結婚しようと言ってくれたのだから。彼が再び私の元に帰って

きたら、そのときこそ幸せになれるって信じたい。

(うん、今日も頑張ろう)

私はゆっくりと目を開けて席を立った。滞在時間は十分程度。扉に向かい歩きながら、あの人のほうにちらりと視線を向けた。この行動も気がつけば習慣になってしまったようだ。

いつもの彼は、正面の聖像を心ここにあらずといった感じで眺めていて、私の視線に一度も反応したことはない。

今日もいつもどおりだと思っていたら、突然彼の視線がこちらへと移り、目が合った。端麗な顔立ちの男性がこちらをじっと見ている。いつも横顔ばかり見ていたから、私は息が止まりそうになる。

(……え、うそ……、こっちを見てる!?)

油断していた私は完全に動揺して、露骨に視線を逸らしてしまう。胸の鼓動がせわしく鳴り響き、胸に手を当てて心を落ち着かせようとしながら足早に教会を出た。

(まさか目が合うなんて……。どうしよう、いつも私が見ていたことに気づかれたかも……)

知りもしない相手に、じろじろと見られるのはいい気がしないはずだ。そんなことはわかっていたのに、私は興味本位から二年もの間、彼を観察していた。気づかれてないから大丈夫なんて、自分勝手な言い訳をして。

(素直に謝ったほうがいいかも。でも……、なんて言えばいいの？ 二年間ずっと気になって見えました……なんて、絶対言えるはずない。どうしよう)

こんなことになるのなら、もっと早い段階で挨拶をしておけばよかった。そうすれば彼に変なふうに思われることもなかったはず。これから教会に通いたいのに、常連の人と気まずい雰囲気にはなりたくない。

教会の外でそんなことを考えていると、「なあ」と背後から聞き覚えのない低い声が響いた。

突然のことに驚いてびくりと体が震えてしまったが、おそるおそる振り向くと、目の前にはあの人が立っていた。ゆったりとした白いシャツを身に纏い、銀色の髪は絹のようにさらさらで、深緑色の瞳はまるで宝石のように美しい。

「きれい……、じゃなくて、こ、こんにちわっ！」

思わず見惚れてしまいそうになるも、慌てて挨拶をしてごまかした。

「……ああ。この指輪、お前のじゃないか？」

「え……？」

そう言った彼の手のひらには、見覚えのある母の形見の指輪がのついていた。

「うそ、どうして……。いつもちゃんとポケットの中にしまっているのに」

私は慌ててポケットの中を探るも、当然指輪は入っていないかった。

「昨日、教会の入り口のところに落ちていた。俺が来たときにはなにもなかったから、お前のだと思っただが。その反応を見る限り、間違っってはなさそうだな」

「あ、ありがとうございますっ！ この指輪、すごく大切なものなんです」

私は指輪を受け取ると、手のひらで優しく包み、胸の前で抱きしめた。

（いつの間に落としてしまったんだろう。しかも、落としたことに気づいていなかったなんて……。これからはもっと気を付けよう）

今回は拾ってくれた人が親切でよかったけど、指輪なんてすぐに換金されてしまうかもしれない。運がよかった。

「そんなに大切なものなら、もう落とすなよ。……ああ、そうだ。ちょうどいいものがある。その指輪、一度貸してもらえるか？」

「え……？」

彼はふっと小さく笑い「すぐに返すよ」と言うので、私は戸惑いながらも指輪を手渡した。彼は指輪を受け取ると、ポケットからシルバーのチェーンネックレスを取り出した。

「なにもないところで転びそうになったり、よくものを落したりしているよな？」

「うっ……、なんで知っているんですか？」

「なんでって……、わりとよく見かけるから」

そんな恥ずかしい姿を何度も見られていたなんて思ってもなかったから、顔が熱くなる。私だけが彼を見ていたのではなくて、彼も私の存在を認知していたということなのだろう。少し嬉しい気もするが、今はそれよりも恥ずかしさのほうが勝っていた。

「こうしておけば落として失くすこともないだろう？」

彼はそう言うと、指輪を通したネックレスを私の前で広げて見せてくれた。たしかにこれなら落とす心配もないし、落としたとしてもすぐに気づきそうだ。

「ありがとうございます。でも、よろしいですか？ あ……、お代を……」

「金はいらない。大したものじゃないから気にしないでいい。つけてやるから、じつとして」

「……っ、はい」

彼はそう言うと、私の背後に移動し、指輪のついたネックレスをつけてくれた。急に距離が縮まりドキドキしてしまう。

彼は再び私の前に移動して、確認するように視線を向けてきた。

「悪くはなさそうだ。じゃあ、俺はこれで……」

「あ、ちょっと待ってください」

「まだなにか用か？」

「えっと、あの……お名前を伺ってもよろしいですか？ 私は二ナって言います。いつもこの教会に来てますよね」

「俺の名はレオンハルト。レオンって呼んでくれればいい。俺もそうだけど、二ナも毎日教会に通っているよな」

早速名前を呼ばれて、ドキッと心臓が飛び跳ねる。

彼のことは毎日見ていたけど、話す前と後とだと印象ががらりと変わった。てっきり暗い人なのかと思っていたが、気さくで親切な人のようだ。

（レオンさんってこんな感じの人だったんだ。もっと早くに話しかけておけばよかったな……）

明日からは気持ちよく挨拶できるはずだ。ようやく気になっていた常連と話せるようになり、嬉

しい気持ちになる。

「レオンさんですね、覚えました。明日からはちゃんと挨拶しますね！」

「ずいぶん嬉しそうだな」

「本当はずっと前から声をかけたいなって思っていたんです。でも、お祈りの邪魔をしたらご迷惑かもしれないって思うと、なかなか勇気が出なくて……」

突然レオンはぷつと噴き出した。

「そんなことを気にしていたのか。だから、いつも俺のことを見ていたんだな」

「え……、気づいていたんですかっ！」

私が驚いて答えると、レオンは「あれに気づかないほうがどうかしている」と当然のように言っただ。ますます恥ずかしさが込み上げてくる。

「だけど、声をかけなかったのは俺も同じだ。気にしていなかったし、責めるつもりはないよ。今後もし好きなだけ見てくれて構わないぞ」

「な……っ!!」

からかわれた！

さらに羞恥心に包まれていると、レオンは再びおかしそうにクスクスと笑っていた。

「二ナって感情がそのまま顔に出るタイプか。想像どおりだ」

「もう、からかわないでください！……レオンさんは意地悪な人でした」

「悪い、二ナの反応がかわいくてふざけすぎたようだ」

どこからどう見ても反省しているようには見えなかった。私の中でレオンは意地悪という印象がどんどん膨らんでいく。

「二ナにとつての俺は想像どおりではなかったようだな」

「少し意外でしたが、話しやすくて私は好きです。あつ、私には恋人がいるので、変な意味ではありませんから……！」

思わず本音が漏れて「好き」なんて口に出してしまっただが、変に誤解されたらどうしようと思ひ慌てて訂正する。しかし、レオンは大して気にしていない様子だ。

「なにはともあれ、嫌われていないようでよかった」

「レオンさんは指輪を拾ってくれた恩人です。あ、そうだね。レオンさんはこのあたりに住んでいる方ですか？」

「どうしてそんなことを聞くんだ？」

「私、この近くの食堂で働いているんです。もし立ち寄る機会があったら、ぜひこれを使ってください。この割引券を出せばお得に食べられます」

今すぐに出せるお礼はこのくらいしか思い浮かばなかった。なにもしないよりはいいと思い、鞆から割引券を取り出し、彼に差し出す。

「二ナはこの食堂で働いているのか」

「はい。他にお礼できるものを持ち合わせていなくて、こんなもので申し訳ないですが。ただどおしいって評判のお店なので！レオンさんが来てくれたら私も嬉しいです」

最近、街で話題になっているのは本当だし、私もまかないを毎日食べているが、人に自信を持って勧められるくらいおいしい。

それにレオンがお店の常連になってくれたら、話す機会が増えるかもしれない。元伯爵令嬢の私にはこの街に友人がほとんどいないので、これを機に仲良くなれたら嬉しい。

「ニナはこれから食堂で仕事か？」

「はい、そうですけど」

「そうか、ならばこれから行くか。そろそろ昼時だしな」

「本当ですか!? 嬉しいです。では、早速行きましょう。私、案内しますね」

まさかすぐに来てくれるとは思っていませんでしたので、つい笑みが零れてしまう。お店的にも新規の客が増えるのはいいことだ。私がにこにこしていると、レオンも微笑んでいるように見えた。

「ニナは昼から仕事に入ることが多いのか? いつもこれくらいの時間に教会に来ているよな」

「そうですね。仕事はお昼からなので、いつも教会に寄ってから向かっています」

二人で歩きながらそんな他愛のない会話をします。街外れにある教会から職場の食堂までは十分程度で到着する。

きっと、レオンもこのあたりに住んでいるのだろう。でなければ毎日通うのは大変だ。

「レオンさん、ここが私の働いている食堂です」

店の前に到着すると、足を止めて彼に紹介する。煉瓦造りの外壁はところどころ色あせて年季が

入っているが、温かみがあつてどこかほっとする外観だ。

扉を開けると、早速レオンを店内に案内する。店内にはまだそこまで客はいなかった。ランチタイムより少し早いので、今ならぎりぎり混雑を避けられるはずだ。初来店なので、落ち着いて食事を楽しんでもらいたい。

「あ、ニナちゃん。今日もよろしくね。あら? そちらの方は?」

「リーズさん、お疲れ様です。この方は初めてのお客さんです。レオンさん、空いている席に座っていてくださいね。ちよつと着替えてくるので、その間にメニューを選んでみてください」

「わかった、そうさせてもらう」

レオンは一番奥のテーブル席へと移動していった。教会でもそうだけど、彼は目立たない場所のほうがちがう。綺麗で顔立ちをしているので注目は集めやすい気がする。

(レオンさんは、あんまり目立つのが好きじゃないのかな……)

なんとなくそんな気がした。

ちなみに、今声をかけてきた女性は店主代理のリーズ。薔薇のような赤髪が特徴的な二十代半ばの女性で、いつも明るくて優しい太陽みたいな人だ。彼女は食堂の客に大人気で、リーズ目当てで来る人もいるくらいだ。

私にとっては尊敬する大先輩であり、なにもわからなかった私にいろいろ教えてくれた恩人。私の恋人のジルとは幼なじみで、同じ商家の生まれという縁もあって彼に力を貸している。男爵家の次男のジルと平民のリーズは身分差があるものの仲がよく、ジルが不在の間はリーズが店主を務め

ているのだ。

従業員用の控室で仕事着に着替える。真っ白なブラウスに黒いスカート。そして、白いフリルのついたかわいらしいエプロン。頭にはエプロンとセットになっているフリルのカチューシャをつける。

この衣装を考案したのは従業員の子だった。ジルは従業員の意見をできる限り取り入れて、楽しく仕事ができる環境を作りたいとよく口にしていた。すごく素敵な考えだと思うし、働く側としてもやる気に繋がりやすい。

店主代理のリーズは定期的に新しいメニューを開発していて、私はよく味見をさせてもらっている。ジルがいなくなりずっと心細い気持ちだったけど、リーズのおかげで充実した日々を送れている。

私は準備を済ませて店内へと戻った。

「レオンさん、お決まりになりましたか？」

「ああ、今回は初めてだから、このおすすめされているものを注文させてもらおうよ」

レオンはメニュー表に大きな字で書かれている、スペシャルランチセットを指さした。

「さすがレオンさん。お目が高いですね。当店一押しのメニューです」

「そうだろうと思った。これだけ目立っているからな」

「ああは……、でもおいしいしボリュームもあるのでお得なことには違いないですよ」

実はこのセットには、今後提供する予定の新作料理を入れている。客の反応を見たいという店側

の思惑もあって、通常よりも料理の品数を増やしているのだ。

「ニナが絶賛するくらいだから、期待して待つことにする」

「はい、任せてください」

彼との会話が楽しくて、私は笑顔で答えた。今でこそ自然に笑顔を作れるようになったけれど、働きはじめたころは緊張してぎこちない顔で、客に苦笑いされることも多かった。接客業は笑顔が大切だと聞いて、鏡の前で何度も笑顔を作る練習をしたものだ。

「スペシャルランチセットね。ニナちゃんもお昼まだでしょ？ せっかくだから一緒に食べていきな。お客さんもまだ少ないし、こっちは私一人で平気だからね」

「リーズさん、ありがとうございます。レオンさん、同席しても構いませんか？」

「ああ、構わない」

彼の正面の席に座る。こんなふうに相席する日が来るなんて思いもしなかった。しかも、自然な会話をしている今の状況が不思議に感じる。

「ニナはこの店に勤めて長いのか？」

「えっと、だいたい三年くらいになります。この街に来たのもそれくらい前だったので……」

「他の街から移り住んできたのか」

「まあ……、そんな感じです」

少し間が空いてしまったが、私はなにこともなかったかのようにさらりと返す。私の生い立ちなんて、せっかくの楽しい食事の時間にするべき話ではないと思ったからだ。それに私にとっては思

い出したくない過去なので、素性については一部の人間にしか話していない。

「レオンさんは好き嫌いとかありますか？」

「俺か？ 特にはないな。基本的に出されたものは食べるよ」

「偉いですね」

「そういう生活を長い期間送っていたからな」

「そうなんですね」

レオンはどこか遠くを見るような目をしてそう言った。物悲しそうな顔に見えて気になったが、それ以上は詮索しないほうがいい気がして話を終わらせた。

しばらく話をしていると、リーズがスペシャルランチセットを運んできてくれた。

まずは旬の野菜を使った具たくさんスープ。この中にはひと口大にカットされたお肉も入っていて、満足度の高い一品だ。そして、香ばしい香りがする焼きたてのパンに、彩り豊かなサラダと、ハーブで味付けされたソーセージの炙り焼き。さらに、デザートにケーキがついたランチ限定のセットメニューだ。

「うまそうだ」

「レオンさん。このセット、実はおまけがついているんですよ」

「おまけ？」

不思議そうにしているレオンに、パンの上に刺さっている楊枝がついた旗を抜いて見せる。そして、旗の部分を丁寧に剥がし、テーブルに置いた。

「なんと、サービス券がついています。一番当たりは無料券で、割引券は半額と三割引きの二種類になります。すぐお得でしょ？」

自慢げに答えると、レオンはなにかを思い出したかのように、ポケットから私が手渡した割引券を取り出した。

「そういうことか……」

「あはは、バレちゃいましたね。私、あまり運がなくて、いつも三割引きばかり当ててしまうんです。だから、それしか持つてなくて……」

「だけど、なかなか面白い工夫だな。じゃあ、早速開けてみるか」

「はい……」

レオンは先ほど私がしたように、自分のパンに刺さっている旗を楊枝から剥がすとゆっくり開いていく。私はドキドキしながら彼の手元を見ていた。そして、開かれた紙には『無料券』と書かれている。

「無料券と書いてあるが、これは当たりということでもいいんだよね？」

「……うそ、本当に無料券だ。レオンさんすごいです、それ大当たりですよ！ 私なんて一度も引き当てたことなかったのに。一回で当てるとか、一体どんな運を持っているんですか!？」

私は興奮していた。このランチセットはほぼ毎日食べているけど、今まで無料券を引き当てたことがない。以前リーズに聞いたたら、無料券は二日に一人出る程度だと話していた。スペシャルランチセットは人気商品なので相当低い確率であることは間違いないと思うのだが、それをレオンは初

回で引き当ててしまうなんて、どんな強運の持ち主なのだろう。

「そんなに羨ましそうな顔をするなよ。これは二ナにあげるから」

「いえ、結構です。レオンさんが当てたのだから、自分で使ってください。私は自力で必ず当てますのでお気になさらず。また来てくれたら嬉しいですよ」

私が笑顔で答えると、レオンは「そうだな」と小さく笑った。

「ついでに私のこのはずれ券もあげますね」

「はずれ券って自分で言うなよ」

レオンはおかしそうに笑っていて、私もなんだか楽しくなり、自然と笑みが零れていた。

食事中にこんなに笑ったのは、どれくらいぶりだろう。ジルがいたころは、今のうちにこのセツトと一緒に食べながら思いつき笑っていた。彼がいなくなつてからは、お昼はいつも一人で食べている。

ジルのことを思い出すと、胸に棘が刺さつたようにズキズキと痛む。今ごろ彼はどこでなにをしているのだろう。彼は無事なのだろうか。ついそんなことを考えてしまう。

食事を終えると、レオンを見送るために店の外に出た。

「二ナ、今日はありがとう。久々に誰かと食事を摂ったがたまにはいいものだ。それにすごくよかった」

「お口に合ったのならよかったです。たまにと言わず、毎日来てくれて構いませんよ？」

私が冗談交じりに答えると、レオンは「無料券も使わないとな」と返してくれた。

「そうです。使わないともつたいないです」

「じゃあ、また近いうちに来るよ。仕事、頑張れよ」

「はいっ！ また来てくださいね」

レオンの背中を眺めながら手を振っていると、しばらくして彼は振り向いた。そして、小さく笑い手を振り返してくれた。

（レオンさんが常連さんになってくれたら嬉しいな）

この街に来てから三年ほど経つが、親しい人間はリーズしかいない。他の従業員ともそれなりに会話をすることはあるけど、友人と言えるほどの仲ではなかった。

レオンとは今日話したばかりだけど、二年間教会で顔を合わせていたから、不思議と親近感を抱いている。最初から会話も普通にできたし、もしかしたらいい友人になれるかもしれない。そんな期待をどこかで抱いていた。

翌日、私はいつものように仕事に行く準備を済ませると家を出た。

レオンと会うのが楽しみで、家でじっとしていることができず、いつもより早く出てきてしまった。今日は教会で挨拶をする。ただそれだけのことなのに、私の心はどこか浮かっていた。

今まで遠くから眺めているだけの人が、一つのきっかけで一緒にご飯まで食べる仲になった。今日会ったらどんな話をしようかなどと考えていると、あつという間に教会の前まで来ていた。

私は逸る^は気持ちを抑えながら、教会の扉を開く。

ステンドグラスから差し込む光が教会内部を照らし、神秘的な空間を作り上げている。

この時間はいつもレオンくらいしか人はいない。席は決まって左手前だが、なぜか今日に限って彼の姿が見当たらない。教会の中は完全に静寂を保っていて、誰もいなかった。

「なんで……？　いつもいるのに……」

挨拶をしようと意気込んでいたので、彼の姿が見当たらないことにショックを受けていた。今まで見かけない日なんて一日もなかったのに、どうして今日はいないのだろう。私は仲良くなれるかもしれないと思ったけれど、彼は違ったのだろうか。

「そんなことない……。だって、昨日はあんなに楽しそうにしていたし。お店だって、また来てくれるって言ってたわ」

私は不安を紛らわせたくて独り言を呟く。頭の中で考えを巡らせることに必死になっていたこともあり、背後から近づく気配にはまったく気づいていなかった。

「さっきから、ぶつぶつ呟いてなにをしているんだ？」

「ひああああっ!？」

突然背後から低い声が響いてきて、驚きのあまり変な声を上げてしまう。慌てて振り向くと、不思議そうな顔でレオンが私を眺めている。

「驚かせてしまったようだな、すまない」

その言葉に私は苦笑いをする。

「いえ、私のほうこそ大きな声を上げてしまいましたすみません。驚かせてしまいましたよね」

「別に謝らなくていいよ。新しい二ナの一面が見られたことだしな」

「もうっ……。やっぱり、レオンさんは意地悪ですね」

茶化すように言われて、私はついムツとしてしまう。でも、今日もレオンに会えたことが嬉しくて、気づけば怒りは消えていた。

「今日はずいぶん早いんだな」

「レオンさんに挨拶しようと思って……」

レオンは驚いた表情を浮かべる。

「俺に挨拶するために早く来たのか？」

「はい。レオンさんと教会でお話できると思うと、家でじっとしていらなくて……。あ、変な意味じゃないですよ」

慌てて答えると、レオンは困ったようにため息を漏らす。

「二ナ、お前には恋人がいるのだろう？　そういう誤解を招くような言い方はよくないと思うが……。俺も一応男だし、二ナの恋人が嫉妬するんじゃないか？」

「ち、違います！　そういう意味ではまったくありません。私はただ、レオンさんと友達になれたらいいなって思っていただけで……」

私が一人で焦っていると、「そういうことか」とレオンは納得している様子だった。

(いきなり変なこと言わないでほしい。でも……。考えてみたらそうよね。リーズさんのように仲良くなれたらって思っていたけど、彼女は女性で、レオンさんは男性だもの……。私、なんでそん

なことに気づかなかつたんだろう)

この街に来るまで、私には友人はおろか、気軽に話せる相手もいなかった。だから、どの程度の距離感で人と接したらいいのかわからない。私にとって友人の基準となる人はリーズしかいなくて、レオンとの接し方が彼女のときと似ていたから勘違いしてしまった。

私の馴れ馴れしい態度をレオンは不快に感じただろうか。嫌われたくはないけれど、私の非なので仕方がない。

「ごめんなさい。レオンさんの言うとおりです。私、レオンさんと友達になれるかもしれないって勝手に浮かれてました」

「いや、別に謝らなくていい。俺は気にしていないし、これから気をつければそれでいいんじゃないか？ それに友人になるのは大歓迎だ」

落ち込んでいると、意外な言葉が耳に入ってきた。私は驚いて視線を上げる。

「あいつ、私と友達になってくれるのですか？ 聞き間違いじゃないですよ？」

「聞き間違いじゃない。昨日、少しだけ二ナと話せて楽しかったからな。俺もまた会いたいと思っていた」

「嬉しいです！ では、これから私たちは友達つてことで！ よろしくお願いします」

「改まって言われると変な感じがするが、こちらこそよろしくな」

嫌われたかもしれないと思ったけれど、勘違いだったようで安心した。だけど、せっかく友達になれたのだから、この関係は壊したくない。今後は距離感を考えて接しなくてはならない。

(あとでリーズさんに相談してみよう……)

私に新しい友達ができたことを知れば、リーズも喜んでくれるはずだ。

「レオンさんつて、恋人はいますか？」

「俺か？ 今はいない。欲しいとも思っていないからな」

「そうなんですわ……」

「意外か？」

意外と言われたらそのとおりだ。レオンは綺麗な顔立ちのうえにがっちりとした体格をしていて、女性受けしそうな容姿をしている。私は昨日、初めて話したばかりだからレオンがどういった人物なのかはわからない。だけど、話しやすく面白く、きつと引く手あまたなのではと思っていた。

「はい。こんなに素敵なので」

「今は誰かを好きになる気持ちにはなれないってところだ」

そう言ったレオンの瞳は遠くを見ているようで、どこか悲しそうに見えた。これ以上は語りたくないから、そう答えたのだろう。友達にはなれたけれど、まだそこまで深く踏み込むべきではないと思い、気になってもそれ以上聞くことはしなかった。

(そういえば、レオンさんつていつもここでなにを願っていたんだろう)

毎日通うほどの理由がきつとあるはずだ。私もそうだから、なんとなくわかる。

(なにか力になれることはないかしら?)

「レオンさん、恋愛相談でしたら私にお任せください」

思いついたことをそのまま口に出していた。レオンは一瞬きよんとしていたが、突然噴き出したように笑いはじめる。

「ふっ、くくっ……」

「……え？ あの、レオンさん……？」

「いきなり笑って悪い。ニナが予想外なことを言い出したから。恋愛の悩みがあつてここに通っているわけではないよ。もしかして、片思いしているとも思ったか？」

「それは……」

私が戸惑っていると、レオンは「失恋もしてないし、禁断の恋に手を出してるわけでもない」ときっぱりと否定する。ここまで言うからには本当に恋愛の悩みではないのだろう。また思い込みで突っ走ってしまうところだった。

（恥ずかしい……）

いたたまれなくなり俯いてしまう。レオンには恥ずかしいところばかり見せている気がする。

「とりあえず、立ち話もなんだし座らないか？」

「そうですね」

「どこに座る？ ニナがいつもいる前の席に行くか？」

「いえ、あの席がいいです」

私は迷うことなくレオンがいつも座っている場所を指さした。

「もしかして、ニナもあそこに座りたかったのか？ 俺がいつも奪っていたんだな。すまない。次は違う席に座るよ」

「ち、違います。レオンさんがいつも座っている席からは、どんな景色が見えるのか気になっていんです」

そう答えると、彼は不思議そうに私を見た。

「どうされましたか？」

「昨日から思っていたけど、ニナってだいぶ変わっているよな。気にするところが他の人間とは違うというか……。どの席に座っていても、見える景色なんて大差ないとは思うが」

「ここにいるときのレオンさんってなんだか寂しそうで、なにか別のものが見えているのか、なつて思っていたんです。私もあの席に座ったら、感じられるものがあるのかも……。なんて、考えてました」

「よく俺のことを観察しているんだな。だけど、俺も人のことは言えないか。いつも祈りを終えたあとのお前の顔は穏やかで、勝手に癒やされていた。ニナを女神のような存在に感じていたのかも、しれないな」

「女神って、レオンさん大げさすぎます……。恥ずかしいのでやめてください」

私が余計なことを口走ってしまったせいで、またからかわれてしまった。レオンは親しみやすいが、平気で冗談を言うところがあるようなので要注意だ。

だが、たとえ冗談だとしても、彼の心を少しでも平穏にできていたことは嬉しく感じる。なんと

か笑ってごまかすと、私はいつものように胸に手を当ててお祈りをはじめた。

（レオンさん、ごめんなさい……。明日こそは余計なことを言わないように気をつけます）

今日はお祈りというよりは反省の時間になってしまった。そのあとは、いつものようにジルの無事を願ったのできつと問題はない、ということにしておこう。

「それでは、私はそろそろ職場に向かいますね」

「もう行くのか？」

席から立ちあがると、レオンが声をかけてきた。

「えっと、そうなんです。今日はちよつとリーズさんとお話ししたいことがあって……」

リーズにはときどき、ジルから連絡がないか、なにか彼の安否に関する情報が入ってきていないか尋ねていた。最近話ができていなかったからそろそろ聞きに行こうと考えていたのだ。

それに、この場にいたら、きつとまた私は変なことを口走ってしまう。

「リーズというのは、食堂にいた赤毛の女性のことか」

「はいっ！ 私の尊敬する大先輩です」

「そうか。ずいぶん信頼しているんだな。もう少し話していたかったが、仕事ならば仕方ないか」

「明日も今日と同じくらいの時間に来ますので。そのときにまたたくさんお話しましょう」

残念そうな顔をするレオンに明るい声色を意識して返事をする、彼は「わかった」と言って仕事に向かう私を応援してくれた。その心遣いが嬉しくて再び頬が緩むのを感じながら、私は職場へと向かった。

職場である食堂に着くと、私はまずリーズのいる事務室へと向かった。店主代理のリーズはやる事が多く、混雑時以外はここで事務作業をしていることが多い。

「リーズさん、いらつしやいますか？」

扉の前で声をかけると、「ニナちゃん？ 入って」とすぐに返答がきた。私は扉を開いて室内へと入る。

「どうしたの？ 今日はいつもより早いわね」

「えっと、あの……。リーズさんに相談というか、聞きたいことがありますて」

戸惑いがちに答えると、彼女は「相談？ じゃあ、そこに座って話そうか」と言ってくれた。部屋の中央に置かれたソファーに向かい合わせに腰掛ける。

「もしかして、昨日ニナちゃんが連れてきた、あの素敵なお客さんのことかな？」

「えっ……!? レオンさんのことですか!？」

まさかレオンのことが話題に上ると思っていなかったので、驚いてしまう。リーズはふっと笑った。

「今までニナちゃんがお客さんを連れてきたことなんてなかったし、すごく親しそうに話していたから、気になっているのかと思っただけだ。違う？」

「違います！ 実は、レオンさん……。昨日のお客さんとは毎日教会で顔を合わせていたんです。

二年間、毎日……」

「二年間も？ それはずいぶん長い付き合いなのね」
「いえ、話をしたのは昨日が初めてだったんですけど、その流れでこのお店に招待することになったんです」

私が簡潔に説明すると、リーズは納得した様子で「なるほどね」と頷いていた。

「ねえ、二ナちゃん。私いいと思うよ。応援する。レオンさん、だっけ？ 私はあの人のことをまだよく知らないけど、前に進むにはいい機会だと思う」

「ちよつと待ってください。レオンさんは友人です。そんな関係じゃ……」

リーズはレオンと私の関係を完全に勘違いしている様子なので、慌てて否定した。

「ふふっ、照れているのね。二ナちゃんかわいい」

「ちがつ……」

「それにね、もうジルのことなんて忘れたほうがいいわ。二年間、音信不通のまま戻って来ないのだから、もうここには帰ってこないと思う」

明るかったリーズの声は一変して冷たいものに変わった。侮蔑や怒りの感情が滲み出ているように感じる。

（もしかして、ジルのことをなにか知ってる……？）

そんな疑問が脳裏をよぎる。リーズは二年間、私がジルの帰りを待ち続けていたことを知っていたし、いつも心配してくれていた。音信不通なことに愚痴を漏らすことも度々あったが、ここまであからさまに感情を表に出すことはなかった。明らかにリーズの様子はおかしい。

「リーズさん、ジルのこと……なにか知っているんですか？」

私はぐくりと息を吞むと、意を決して疑問を口にする。すると一瞬、リーズの表情が強張ったように見えた。小さく息を吐く彼女の様子は、なにかを決心したように見えた。

「二ナちゃんには伝えようか迷ったんだけど……、いつか耳に入ることだから話すね」

リーズの瞳はわずかに揺らいでいて、そこに迷いがあるのは明らかだった。これから話そうとしていることの内容がよくないものであることも、今の流れからなんとなく察してしまう。

「ジルは、生きてるよ」

「え……」

突然のリーズの言葉に、消え入りそうな声を出すことしかできない。頭の中が真っ白になるも、すぐに安堵感を覚えて体の力が抜けていくのを感じていた。

（ジルは生きてる……？ 無事だったんだ、本当に……本当に、よかった！）

内心で喜びながらも、どうしてリーズはこのことを私に今まで話さなかったのだろうと疑問に感じる。彼女の表情が硬いのも気がかりだ。

「今は隣国ベルンのとある街にいるみたい」

「えっ、居場所もわかっているんですか？」

「実はね、二か月くらい前に取引のある商人から、ジルをベルンで見かけたって聞いたの。それでジルの兄がベルンに向かって搜索した。そしたら、わりとすぐに居場所はわかったんだ。当然、会いにも行ったよ。そしたら……」

リーズはそこまで話すと表情を暗くさせた。

「聞かせてください」

迷いなくリーズの目を真つ直ぐに見据えて、私は続きを促した。

彼女の様子から、いい話ではないことは簡単に想像できた。だけど、ジルが今なにをしているのか私は知りたい。

「なんでも、ジルはベルンに来てすぐに大きな事故に巻き込まれたみたい。それで、記憶の一部が曖昧な状態になってしまったの」

「え……、事故って、記憶って……。ジルは無事なんですよ」

二年間も音信不通になっていたのだから、事故や病氣も想像していなかったわけではない。けれど、実際にそんな話を聞くと胸の中が不安でいっぱいになる。

「ニナちゃん、落ち着いて。大丈夫だから」

「はい……」

「怪我はもう治っているし、記憶喪失も一時的なことだったみたいで今は回復している。日常生活も難なく送れているようだし。ジルは今、貴族の家でお世話になっているそうよ」

「どういうことですか？」

話の流れがわからず、私は首を傾げた。

「事故が起こったとき、ジルはその家の令嬢を庇って怪我を負ったみたい。だから、ジルのことを命の恩人だと言って彼の世話をしているそうよ。それでね、すごく言いづらいんだけど……」

リーズはそこまで話すと深くため息を吐いた。本当にこの先の話をしたいのか躊躇^{ためら}っている様子だ。

「リーズさん、全部聞かせてください。ジルは私の恋人です。だから、すべて知っておきたいんです」

「ニナちゃん……。わかった、話すわ。だけど、落ち着いて聞いてね。実はジルは、その令嬢と婚約を結んでしまったそうなの。これは本人にも確認したことだから間違いないわ」

突如として現れた『婚約』という言葉聞いて、一瞬頭の中が真つ白になった。

（婚約って、結婚の約束をしているってことよね……？ でも、それって私に言ってくれた言葉ではなかったの……？）

頭の中がぐちゃぐちゃになり、どこからなにを考えていいのかわからなくなる。

「ジルはニナちゃんと結婚するつもりはないし、もう恋人でもないと思ってるってこと。だから、もうジルのことを待つ意味はないの……」

リーズから事実を突きつけられ、胸の奥を抉^{えぐ}られたように苦しくなる。

「ジルはもう、私の傍にはいてくれない、ってことですか？」

「ええ、そうなるわ……」

私が問い返すと、リーズは苦しそうに眉を顰^{しか}めて頷いた。

「そう、なんです」

私もリーズもお互いぎこちない会話になっていた。彼女が冗談でこんな話をしていないことはわ

かるし、私に伝えるかどうかもすぐ悩んだのだろう。そんな彼女の様子から、これが紛れもない事実であるということを通しては理解していた。家族に捨てられ、ようやく幸せを手に入れられると思っていたのに、やはり自分は幸せになれるのだと突きつけられたようでショックだった。

最初から期待なんてしなればよかった。けれど、ジルと過ごした時間は間違いなく存在していて、その間私は幸せだった。それにジルと出会ったことでリーズとも知り合うことができた。だから、複雑な気持ちだ。

「二ナちゃん、仕事はしばらくお休みしていいよ。気持ちの整理がいたら戻ってきてほしいけど、この店にいたらジルのことを嫌でも思い出しちゃうでしょ。どうしても難しいのなら、残念だけど……」

「私、このままここで働きたいです」

「本当？ それはすごく嬉しいわ。でも、無理しないでね。決めるのはすぐじゃなくて平気よ。とりあえず、ゆっくり休んで……」

「いえ、私なら大丈夫です。こう見えて意外と立ち直るのは早いんですよ」

この店から追い出されてしまったら、また私は居場所を失う。笑って答えたが、今のは強がりだ。そして、リーズは私の虚勢に気づいたのか首を横に振った。

「じゃあ、こうしましょう。とりあえず一週間二ナちゃんは休暇ね。今まであまり休みを取ってなかったし、ちょうどいい機会だからゆっくり休んで。これは命令よ」

「リーズさん、……ありがとうございます」

きつと、これはリーズなりの優しさなのだろう。私を氣遣ってそう言ってくれていることをわかっていたからこそ、頷くしかなかった。本当は働いていたほうが余計なことを考えず気がまぎれそうだが、彼女の優しさを無下にはできない。

リーズと話を終えると、店には顔を出さずに自分の家へ帰った。

それから五日間、私はほとんど出かけることなく、ずっと部屋に籠って一人で過ごしていた。

もう祈りを捧げる意味はなくなってしまったけれど、レオンに会いに教会へ行こうか少し悩んだ。しかし、私はすぐに顔に出るタイプなので、きつとレオンにも心配をかけてしまう。あまり迷惑をかけたくなかったので、しばらくは教会に行くのを控えることにした。

ジルへの思いについても時間とともに考え方が大きく変わっていく。最初は裏切られたことにショックを受けたし、悲しくて悔しい感情も大きかった。けれど、今では彼が幸せならば、それも悪くないのではと感じるようになっていた。

あの日、ジルに声をかけてもらわなければ、私はどうなっていたかわからない。伯爵令嬢だった私が、平民としてすぐに順応して生活するなんて不可能に近い。

しかも、所持金も移動費用でほとんど使い果たしていたから、働くところを提供してもらえて本当にありがたかった。私にとってジルが恩人であることは、絶対に変わらない事実だ。だから、彼には感謝をしているし、幸せになってほしいと本気で思っている。

思ったよりも早く気持ちが吹っ切れたのは、二年という時間のおかげかもしれない。

リーズにこれからも食堂で働いてほしいと言われて、私はとても安堵した。そんな自分に気づい

たとき、私が彼に縋^{すが}っていたのは、やっと手に入れた居場所を失うのが怖かったからではないかと思っただ。

(リーズさんのおかげで、気持ちを整理できたみたい。なんか、すぐくすつきりした……)
前向きになると、家に閉じ籠^{こも}っているのが嫌になり、久しぶりに外に出て買い物をすることにした。

部屋から出ると、眩^{くら}しいほどの日差しが全身に注ぐ。暖かく心地のよい太陽の光を感じながら、目を閉じて深く息を吸い込む。

「やっぱり、部屋の中より外のほうが気持ちいいわ……。よし、今日は思いっきり買い物を楽しもう！ たまには贅^{ぜい}沢も許されるよね」

口から出たのは思ったよりも明るい声だった。私は軽い足取りで歩き出した。

街の中心部へ移動すると、見慣れたいつもの光景が広がっていた。賑やかな話し声に、行き交う多くの人々。仕事を休んでまだ五日しか経っていないのに、懐かしさと不思議な安心感を覚える。

「あら？ ニナちゃん。久しぶりね」

露店が並ぶ通りを歩いていると、聞きなれた声に呼び止められた。彼女は私の働いている食堂に野菜を卸してくれている青果店の娘だ。たまに、こうやって露店販売もしている。

「あ、こんにちは。お久しぶりです」

「たしか休暇中って聞いてたけど、ちゃんと楽しめてる？」

「えっと、実はずっと家にいて……」

「ええっ……、もしかして具合が悪くて休んでいたとか？ 休暇じゃなくて休養だった感じ？ よく見たら痩せた気がするわ。ちゃんと栄養を摂らなきゃだめよ。そうだ、私が体にいい野菜を選んであげるね」

「あのっ……」

「安心して、ニナちゃんはお得意様の従業員だからサービスしとくよ」

彼女は一方的にそう言っていると、紙袋の中に次々と野菜を詰め込んでいった。

病気だったわけではないと言おうと思ったものの、それ以上詮索されても答えづらい。私は「ありがとうございます」とお礼を伝えて、忙しい彼女を見守っていた。

「こんなところかな……。なんか重くなっちゃったかも。持てそう？ 無理なら、あとで誰かに配達をお願いしておくけど」

「大丈夫です。こんなにたくさん、ありがとうございます」

「ふふっ、いいのよ。早く元気になってお店に戻ってきてね」

挨拶をして、店を立ち去った。買い物を目的としていたので、食材を手に入れられてよかったのだが、両手が塞がってしまった。

(さすがにこれ以上にも持てないし、一度家に戻ったほうがいいかも……)

面倒ではあるが荷物を置きに帰ろうと思いき出すと、視界にレオンの姿を捉えて、思わず声をかけた。

「レオンさん？」

私の声に気づくと、彼はこちらへと近づいてくる。

「久しぶり。今日は買い物か？ それにしても、すごい量だな」

「これにはいろいろありまして……」

私が苦笑いを浮かべながら答えると、レオンは「重そうだな、持とうか？」と言ってくれた。私の返事を聞かずに両手の荷物に手を伸ばしてくるので、慌てて「大丈夫です」と言う。

「一度、家に荷物を置きに行こうと思っていたので……」

「そうか。他にまだ買うものはあるのか？」

「はい、また戻ってくる予定です。レオンさんはまだここにいますか？」

私の問いにレオンは「ああ」と頷いたので、「急いで戻ってくるので、また見かけたら声をかけますね」と返した。しかし、次の瞬間、私の両手を塞いでいた荷物はふわりと浮かんで軽くなる。

「それならこれは俺が持つよ。そうすれば家に戻る必要もなくなる」

「でも、それ結構重いですよ。申し訳ないです……」

「これくらい大したことはない。一応、元騎士だからな」

「えっ、レオンさんって騎士さんだったんですか？」

一瞬意外に思ったけれど、なんとなく納得できた。レオンは細身ではあるが、肩幅はがっちりとしている。手の皮膚も硬く、何年も剣を握っていた証拠のように思う。品行方正なところもこの国の騎士らしい。そして、私が両手で持っていた荷物を、軽々と片手で持ち上げていた。

「まあな。それよりも、ニナが行きたい場所を教えてください。ついていくよ」

「そんな、悪いです」

「それなら、今度またニナの店の割引券をくれ。それがお礼、つてのはどうだ？」

「……わかりました。じゃあ、今日はレオンさんに荷物持ちをお願いします」

レオンは自信ありげに「任せておけ」と言って笑っていた。そんな彼の姿を見ると、私の気持ちも和んでいく。

それから、二人でいろいろなお店を見て回り、久しぶりに楽しい時間を過ごした。青かった空はいつの間にか夕焼けに呑み込まれようとしている。

「もうこんな時間ですね。レオンさん、今日は一日付き合ってくれてありがとうございました。久しぶりにすごく楽しかったです！」

「お前、すぐくはしゃいでいたもんな。もう少し時間はあるか？」

「え……？ はい、大丈夫ですけど……」

「それじゃあ、久しぶりに教会に行かないか？ この時間なら、人もそう多くはいないはずだ」
レオンの提案により、私たちは教会に向かうことにした。この時間帯の教会は初めてだった。

教会の白い外壁が夕焼けの赤色に染まり、いつも見ている姿とはまた別の印象を受ける。

レオンは私の荷物で両腕が塞がっていたので、私が教会の扉を開いた。昼間にはついていない蝋燭の火が灯っており、室内をほんのりと照らしている。ステンドグラスから入り込む夕焼けの光が幻想的で、思わず息を呑んだ。

（昼間とは全然違う……）

「この時間に来るのは初めてか？」

私が入り口で立ち尽くしていると、レオンが声をかけてきた。

「はい。いつもレオンさんと会う時間にしか来たことがありません。レオンさんは、この時間帯もよく来られるのですか？」

彼はその問いかけに「たまにな」と答えると、いつもの席に移動した。私も彼についていき、隣に腰かける。教会内には人の気配はなく、ここにいるのは私とレオンの二人のみのようだ。

私がここに祈りに来る理由はもうなくなってしまった。けれど、この教会でレオンと過ごす時間は何物にも代えがたく、また前のように通いたいと強く感じた。今度は自分のために祈ればいい。

「レオンさん、私がしばらく教会をお休みしていた理由、聞かないんですか？」

私は正面を向きながらおもむろに口を開く。

「……実は、二ナが教会に来なくなってから三日後くらいにあの食堂に行っただ。急に姿を見なくなつて気になったからな」

「あ、ごめんなさい……」

「別に二ナが謝ることじゃない。俺が勝手に気になっただけだし。それで食堂に顔を出したら、リーズという女性が二ナは休暇を取っていると教えてくれた。せっかく来たのだからと食事を勧められて、しばらく滞在していたんだが……」

レオンはそこまで話すと、口を閉ざした。この先の話をしているのか躊躇っているように見える。「もしかして、リーズさんからなにか聞きましたか？」

「いや、聞いたというか、聞こえてしまったというか……」

彼の態度からして、その内容は私に関してのこと間違いのない。

「それって、ジル……、私の恋人だった人の話ですよ」

私が苦笑いして答えると、レオンは「ああ」と認めた。

「やつぱり……。レオンさんがどこまで事情を知っているのかわかりませんが、すべてお話しします。でないと、気になっちゃいますよね」

「いや、俺は……。話したくなければ、無理して話さなくてもいい」

「いいえ、聞いてほしいんです。変に誤解をされてしまうのは嫌です」

話の一部を聞いただけでは、事実と違うふうに捉えられていることもあるかもしれない。

レオンは私の友人なので、いざれこの話はしようと思っていた。その機会が少し早くなったけどと考えれば、大した問題ではない。気持ちの整理はできているので、ちゃんと伝えることはできると思う。

「ジルの話をする前に、私の生い立ちについての話からはじめますね。少し長くなつてしまいますが、聞いてくれますか？」

私は深呼吸をして心を落ち着かせる。

「わかった。最後まで二ナの話聞こう」

「ありがとうございます。今の私は平民としてこの街で暮らしていますが、三年前までドール伯爵家の娘だったんです」

「……ドール伯爵家？ ああ、そういうことか。納得だ。二ナと初めて話したときから、平民の娘という感じがあまりしなかった。どちらかというと、貴族令嬢のような口調だからな」

もっと驚かれるかと思っていたけれど、レオンの反応は予想よりもかなり薄かった。
「気をつけているつもりだったんですけど、気づいていましたか」

平民として暮らすためには、私もその中に溶け込まなくてはならない。特に客商売をしているので、客にいい印象を持つてもらうためには、平民らしく振る舞うのは必要なことだった。

「俺も貴族との繋がりはそのなりにあるからな。話を逸らしてしまつてすまない。続けてくれ」

「はい……、続けますね。私の母はもともと体が弱かったこともあつて、私を産んですぐに亡くなりました。だから、私は一度も母と話したことはありません。写真で顔を見たことはありませんけれど、すごく優しい人でした。あつ、ちなみにレオンさんが以前拾ってくれた指輪は、母の形見なんです。私が唯一持つことを許された宝物です」

「そうだったのか。二ナは幼いころから寂しい思いをして育ったんだな。思い出させてしまつてすまない」

申し訳なさそうに謝る彼に、私は首を横に振った。

「話そうと決めたのは私なので、お気になさらないでください」

「だが、父親は存命なのだろう？ 母親の話をしてもらわなかったのか？」

痛い質問をされて、私は思わず苦笑した。だけど、この話をした時点で、聞かれることは覚悟していたので続ける。

「父は私のことをずっと恨んでいます。母を殺したのは私も同然ですから……。だから、ともに会話したことはありません。幼いころ、父が不在の間にこっそり部屋に潜り込んだことがあります。どうしても父の部屋にある母の写真を一目見てみたくて……。そのとき誤って形見の花瓶を割ってしまったんです。当然、帰ってきた父に怒鳴られました。それがあまりにも怖くて、それ以来父との接触は避けています」

母の姿を見たのはあれが最初で最後だった。

そのあと、父は仕事で王都にすることが増えて、顔を合わせる機会も減っていった。きっと、私と顔を合わせるのすら嫌だったのだろう。

父の不在時に部屋に入ることはできたが、あの出来事がトラウマになり部屋に近づくことはなかった。執事に報告されて、また怒鳴られるかもしれない。幼いころはそれを恐れていた。

私の話を聞いていたレオンは重々しい表情のまま黙っていた。無理もないと思う。こんな話を聞かされたら、なんて言っていかわからなくて当然だ。

「この指輪は、父の部屋に忍び込んだときに持ち出したものです。返そうと思ったのですが、怒られるのが怖くてずっと言い出せなくて……」

「そうだったのか」

「でも、お母様の形見を一つくらい私が持っていてもいいですよ！ お父様ばかり独り占めしてずるいですし……」

私が不満を漏らすと、少しだけレオンの表情が緩んだ。

「そうだな。ニナの母親も、お前に持っていてほしいと思っているんじゃないか。結果的に悲しい出来事になってしまったが、お前を産むことを選んだのは母親だ。ニナを責めるのはまったくの筋違いだな」

レオンの言ってくれた優しい言葉に胸の奥がじわりと熱くなる。

「お母様は、私のことを愛してくれていたと思いますか？」

「ああ、間違いなく愛していたと思う。自分の命と天秤にかけてまで、お前を産むことを選んだ。それは相当な覚悟があつてのことだと思う。ニナまで自分が生まれてきたことを悔いては、母親が悲しむぞ」

「そう、ですよねっ……」

私の目には薄っすらと涙が滲んでいた。視界が曇り、今にも溢れてしまいそうになる涙を必死に堪える。もしかしたら母がどこから覗いているかもしれない。母に泣き顔は見せたくなくて必死に笑顔を作ろうとしていた。

そんな様子を見ていたレオンはふっと笑い、「ニナは強いな」と優しい声で呟く。少し照れくさかったけれど、彼の温かい言葉が素直に嬉しかった。

「父との関係はずっと冷え切っていたんですが、私が十歳のときに突然父は再婚しました。あんなにも母に執着していた人が、再婚するなんて最初は驚きました。だけど、すぐに気づきました。私を押しつける都合のいい人間が欲しかったんだって。再婚してからも、父はほとんど領地には顔を出すことはありませんでした」

「そうか。新しい家族とは仲良くできたのか？」

「いいえ、私にとっては地獄のような生活のはじまりでした」

決して不幸自慢をしたいわけではないが、私の過去には明るい話がなにも一つないので、話している自分でさえも嫌な気分になってくる。

「無理に話さなくてもいいぞ」

「いえ、ここまで来たら全部聞いてほしいです。レオンさんが嫌でなければですが……」

「俺は構わない。ニナが話すことで、少しでも気持ちが楽になるのであればすべて聞くよ」

リーズにも身の上話をしようとしたことがあったが、父の話を聞いた時点でずいぶん参ってしまった、「もういいよ」と止められてしまった。私のことを気遣ってくれたのだとは思うけれど、少し寂しかった。

（本当にレオンさんって優しい人だな……。そこまで言ってくれたんだから、もうすべて話そう）
私は覚悟を決めると、義母と義妹の話をはじめた。

「再婚相手には連れ子がいました。年は私より一つ下で、名前はクロエと言います。初めて二人に会ったとき、嫌な予感がしました。私のことを邪魔者でも見るような目で見ていたから。先ほども言いましたが、父は再婚後もほとんど領地には戻ってこないで、二人は好き勝手やっていました。邸の内装や家具を自分たちの好みに一新させたり、気に入らない使用人はすべて解雇したり……。歯向かう人間は私しかいなかった。だから、私の存在が邪魔だったんだと思います」

「それはひどいな」

「はい。クロエは勝手に私の部屋に入ってきては、よく私物を持ち出してきました。欲しいものがあるなら自分で買えばいいのに、そうしないのは私を困らせたかったんでしょね」

「そんな者たちなら、話をしても無駄ということか」

彼の言葉に私は大きく頷く。

私は何度も義母にクロエの盗み癖をどうにかしてほしいと頼んだが、「娘が盗みなんてするはずない」「人聞きが悪いことを言わないで」と、逆上されることがほとんどだった。

あの邸には私の味方など誰もいない。あの邸にいる以上、私は耐えることしかできなかった。

「これは父から私への復讐だったのかもしれないです。きっと私を追い出たくて……」

「それはちよつと飛躍しすぎじゃないか？ さすがにそこまでは……」

「いいえ、きっとそうだと思います。父に長年仕えていた執事は解雇されずに残っていたので、邸で起こっていることは手紙で報告していたはずです。それなのに六年もの間、放置し続けた。見て見ぬふりを続けていたんです」

あのとき、私の置かれている状況を知って痛む心があつたなら、なにかしらの行動を起こしたはずだ。しかし、現実にはなにもしなかった。

「たしかに……、それもそうだな。ニナはその生活を息苦しく感じて、邸を出たってことか」

「義母に追い出されたというのが正しいです」

あの日、私は母の形見の指輪を家に置いて出かけていた。

帰ってくると、いつものようにクロエが私の部屋にいて、その手には指輪があつた。焦った私は

取り返そうと必死になり、クロエと揉みあいになる。彼女は階段の手前でバランスを崩し、転げ落ちてしまったのだ。

幸いなことにクロエは軽い打撲で済んだが、義母が激怒し、そのまま私を邸から追い出した。

「それは災難というか、ひどい話だな」

「でも、結果的にあの邸から離れることができたのでよかったです。それで、この街に来ました」

「相当辛い思いをしてきたんだな。だけど、今のニナはすごく幸せそうに見える。ここでの暮らしは楽しいか？」

「はい、慣れるまでは少し戸惑いましたが、ここには私を責めるような人はいないし、毎日がすごく楽しいです」

私は笑顔で答えた。その言葉に嘘はない。

「今まで苦労ばかりしてきたのだから、これからの人生は幸せなことがたくさんあるはずだ。今のニナは過去を引きずっているようには見えない。ちゃんと前に進もうとしている人間は幸せになれるよ」

レオンは「毎日教会にも来ているし、神様も見ているはずだ」と付け加えた。彼の言葉に元気づけられ、気づけば私の心は軽くなっていた。

「レオンさんって、褒めるのが上手ですよね」

「そうか？ 俺は思ったことを言ったまでだが……」

「でも、レオンさんの言葉で救われた気がします。私の過去の話を最後まで聞いてくれてありがと

うございました」

「思い出すのも辛かっただろうに、話してくれてありがとう。友人として二ナの幸せを願っている。これからもなにかあれば話は聞くから、遠慮なく言ってくれ。やっぱり、二ナには笑顔のほうがいい合っているからな」

「レオンさん、ありがとうございます。でも、恥ずかしくてにやけてしまいそうです」

本当にこの人は優しい。過去を思い出して嫌な気分だったのに、彼の言葉のおかげで前向きな気持ちになった。

「俺を気にせずにやけていいぞ」

「もうっ、そういうところは意地悪なんだから……。それにまだ話は終わっていません。このあとはジルの話もあるので……」

「もちろん聞くよ。愚痴になっても全然構わないからな」

空気が和んだところで、レオンは冗談を混ぜてくる。

私はそのあと、この街に来てからの出来事を順番に話した。

初めて声をかけてくれたのがジルであること。行き場のなかった私に空いている従業員部屋を無償で貸してくれたこと。そして、食堂で働かないかと誘ってくれたのもジルだったこと。

恋人になったきっかけは、常連客に私たちの関係を冷やかされたことだった。それから私が変に意識してしまい、ジルもそんな感じになって、恋人になった。

とはいえ、今までの生活となにか大きく変わったことはなかった。以前から二人で出かけること

はあったし、同じ職場なので毎日のように顔を合わせていたから。だけど、初めての恋人だったので、今思い返すと恥ずかしいけど結構はしゃいでいたと思う。

ジルが結婚を切り出したのは、リーズの助言があったからだ。ジルは次男だが長男が病弱なため、ジルが中心になって店を経営していた。

しかし、彼には少し頼りない部分があった。例を挙げると、簡単に人を信じたり、後先考えずに行動したり。

それを見兼ねたリーズが、所帯を持ったならジルも責任感を持つのではないかと言ったそう。この話は、ジルが行方不明になったあとに、常連の一人から聞いた。

「お前にとっては、恩人だったんだな」

「はい。今思うと、ジルにはしっかりした人のほうが合っていると思います」

「……お前はそれで納得できるのか？」

「現実を受け入れるしか選択肢はないので、私もジルのことはさっぱり忘れて次の幸せを探そうと思います。あつ、今すぐに恋人が欲しいとかではないですからね」

話の流れから誤解されそうな気がしたので、そこはしっかりと否定した。

私は誰でもいいから恋人が欲しいわけではないし、自分が幸せになる方法は恋愛以外にもあると思っています。それに、こういう流れになるとレオンはまた意地悪なことを言ってくる気がする。

「お前は強いな」

からかわれると予想していたのに、想定外な言葉が降ってきてきょとんとしてしまう。